
公爵令嬢は用心棒！

鈴木 鶉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

公爵令嬢は用心棒！

【Nコード】

N0107W

【作者名】

鈴木 鶉

【あらすじ】

貧乏公爵グレイ家の長女アグネスは女ながらも剣術バカの亡父に鍛えられた凄腕剣士。美少年だがヘタレの弟クリスト、家事はできるが騙されやすい執事のサイモンの二人を養うため、性別を偽っての用心棒仕事で生計を立てている。貧しくとも平和な日々。しかし、ある日、クリスが国一番の宝石商ヘンレイン商会のリリーお嬢様を偶然助け恋に落ちたことがきっかけで、グレイ家は旧王家を巡る争いごとに巻き込まれていき？恋愛要素が多めの予定（↑たぶん4章あたりからボチボチやらかしてくるはず）ストーリー展開は驚きの

浅さ、更新は驚きの遅さ、文章は意味不明。スミマセン。

プロローグ（前書き）

駄文失礼します。私の脳みそがふわふわなせいで、文体はかなりのライトタッチとなっています。漢字嫌い、広辞苑ってナニソレどこの焼き肉屋？本格的な文体のファンタジーをお求めの方はまわれ右で何卒・・・

プロローグ

「・・・お願いです。どうか・・・あの子だけは、お守りください。私はどうなってもかまいません。でも、あの子だけは・・・」

このまま、ここにいれば、きっと私と同じように殺されてしまう。それならばいっそ、あなたの子としては生まれなかったことにして・・・」

息も絶え絶えに、彼女は懇願した。

本来なら、その願いを聞き届けることなど王にはできないはずだった。

あの赤子の運命は、王の持つ絶大な権力をもつてしても決して変えてはいけないものだったから。

しかし幸いなことに、赤子は、まだ、誰にもその存在を知られてない。

そして彼女の言うとおり、王が赤子を引き取っても、殺されてしまう可能性が高い。

何より、王は彼女を心から愛していた。

一目見た瞬間から美しい彼女の虜になり、半ば強引に王宮に連れてきたのは王だった。

そのせいで、彼女はこの若さでこのような悲しい最後を迎えること

になったのだ。

彼女の命が助からないのはもはや明白、守れなかったのは己の無力さゆえ。

せめて、自分が愛した女の、最後の願いくらいは叶えてやりたい。彼女によく似た面差の、愛し子を守りたい。

その想いの前では、国の定めなど何の意味があろう。

『……わかった。

あの子は、そなたの兄上の実子として、なんの苦勞もなく一生幸せに暮らすであろう。約束する。』

王のその言葉を聞き届けたのち、彼女はようやく安心したように微笑み、目を閉じた。最後の涙が頬を伝う。

美しく若い王妃。

力を失ったその指には、この国の正妃のみが嵌めることを許される、紅輝石の指輪が光っていた……。

その後、王は、彼女との約束を守り、自分の第一子を彼女の兄に託す。

彼の子だということ、つまり、赤子は王位継承権第一位の立場にあった——その重大な事実、赤子本人にも知らされることなく、闇に葬られた……。

かのように、見えた。

しかし、火種というものは、完全に消してしまわなければ再び燻り始めてしまうものだ。

この火種が災いの白い煙を上げ始めたのは、およそ1000年経った後のこと。

それは、少年の初恋だった。

聖マルコ共和国。

ほんの50年ほど前に王政から共和制へと移行したばかりのこの国の都、その中心部に少年が彼女と出会った教会はあった。

白い肌。

繊細な飾りの髪留めで丁寧に結わえられた豊かな栗色の髪。

ガラスのように透き通る青い瞳、長い睫毛。

いつも乳母を従えて、祈りの場にふさわしい慎み深い黒のシンプルなワンピース姿で教会を訪れる彼女。

その美しさは街中で評判であつたし、そもそも彼女はこの国で、二を争う裕福な宝石商人、ヘンレイン商会の愛娘、リリー・ヘンレインとしても有名だった。

大金持ちのお嬢様、そのうえ品行方正な美少女。

当然のことながらひっきりなしにお見合いの話がもちあがるリリー。

そのお相手は、議員の息子から外国の王族、大商人の跡取りまで様々で、元は高貴な貴族の出とはいえ、完全に没落した貧しい少年にはそれは叶うことのない初恋のはず、だった。

その日までは。

暑い、暑い、夏の日。

まだ比較的涼しい教会の中でのミサを終えた人々は、じりじりと真夏の太陽に焼かれた炎天下に放り出され、うんざりしたような顔で家路を急いでいた。

石畳の道は熱をおびて、生卵でもコチンと割り落とせばじゅうじゅうと石焼たまごができあがりそうなほど。

そんな中、思春期まつさかりの少年の脳みそはもっと高温に沸騰していた。

（あああ、かわいいなあ……。あああああ、あの子とひとことでも口がきけたらなあ……。）

乳母とともに馬車に乗り込むリリーお嬢様を見つめながら、ぼやーっとした気色の悪いにやけ顔で少年は妄想を繰り広げる。

少年の名前はクリス・グレイ。

ちなみに元々王家の血を受けるグレイ家は公爵の身分で、すでに両親もなく姉とふたりきりのクリスは、グレイ家のれっきとした当主

でもある。

しかし公爵家とは言ってもあくまで『元』。

クリスが生まれるずっと以前に共和制への移行、王家の廃止が決まり、現在では何の特権もないのだ。

代々世渡りが上手とはいえ、まさにその身分だけに頼って生き延びてきたグレイ家、現当主のクリスに遺されたものといえば、郊外のだっ広い領地に広がる牧場とオリーブ畑、ブドウ畑。

部屋数のやたら多い、吸血鬼でも住んでいそうなぼろぼろの古城のみ。

昔は大勢いたという使用人も、領地内の数軒の小作農家をのぞけば、いまや仕えているのは代々グレイ家の執事を勤めてきたフィールド家のサイモンという青年ひとりきりだ。

もちろん、身分制度は廃止されているとはいえ貴族イコール高貴な血筋という認識はいまだに強い。

姻戚関係を結べば箔がつくという理由で、身分を持たない商人や新興有力市民の間で貴族たちは結婚相手として持て囃されてはいた。

現に、グレイ家のように議員や商人などへの転身をうまくはかれなかった貧乏貴族たちは、娘や息子を金持ちの家に送り込むことでかろうじて生き残りを果たしてきたのだ。

しかしながら、クリスは姉いわく

「こおんの『顔だけは無駄にいい、しかしヘタレ』というグレイ家のDNAをこれでもかっつっ！！！！っていうほど受け継いだ、ドがつくほどのヘタレ愚弟がああああ！！！！」

であり、詩や小説を読んですごすのが好き、夢見がち、世渡り下手、友達は小鳥さん。

いくらその身分をもってしても、リリーに求婚することなんて夢のまた夢だ。

（せめて僕も姉さくらい強くてかつこよければなあ……）

クリスの姉のアグネスは、生計をたてるため良家の子弟に細々と剣術を教えていた父に小さなころから剣を習い、いまやその腕前は、趣味でやっていた生前の父をはるかにしのぐほど。

その剣の腕をもちいて……

と、その話はまた後にしよう。

どうやらリリーお嬢様の馬車が動き始めたようだ。

ヘンレイン家の屋敷はグレイ家と同じく郊外にあり、都の中心に位置する教会とは少し離れている。

グレイ家の敷地の周囲をぐるっと周り、もう少し山手の方に進んだところにあるのだ。

まあ敷地だけならグレイ家の方が広いであろう。

もっとも大半は石ころだらけの荒地で、半分野良化した羊の群れが草を食んでいるだけなのだが。

ここがグレイ家の敷地であることを知っている者もほとんどいない。クリスマスだって、証書の記載を見なければどこが自分の敷地だかわからないのだから。

ちなみに商人の娘であるリリーお嬢様は立派な二頭立て馬車に、乳母、御者つきだが、グレイ元公爵 クリスのことだ は徒歩で帰る。むふふと虚しい妄想に浸りながら炎天下の道をゆく。

こんなに暑いのだ。

すっかり忘れ去られた存在とはいえ、公爵の身分を慮ってサイモンに無理やり着せられた一張羅の上着やなんかはさっさと脱ぐにかぎる。

クリスを公爵だなんて知ってる人間はいないし、本人にもその気はない。

人目もはばからずそこらへんの街の少年のような軽装になると、クリスは用水路沿いの涼しい日陰の道に入った。

そして郊外の水源地から街の用水路へと流れ込む小川に沿って上流へと向かっていく。

「やあ。今日も暑いね。水浴びは気持ちよさそうだね。僕も君たちみたいにそこで泳ぎたいくらいだよ。」

・・・小川で遊ぶ、小鳥に声をかけながら。

途中で城壁の外に出た。

ここから外は、修道院や農家、貴族の豪邸のあるエリアだ。

王国であった時代は、夕刻を告げる時計塔の鐘の音と同時に城壁の扉は固く閉ざされたものだが、現在では夜間も見張りの兵士が数人立っているだけで門は閉じられることはない。

城壁の外にも小川は伸びている。

この小川にそっていけばグレイ家の敷地へとつながる。

道中、サイモンお手製の塩漬けハニベリーをかじりながら、水筒の紅茶を飲みつつ、小川で足を冷やしつつ。

「リリーさん、ああ愛しのリリーさん、僕は君を見るだけで大空を羽ばたく小鳥になれそうさ。

聞いてくれ、この僕の心臓の音を！

そうさ、君はまるで……えと、まるで……僕のはちみつみたいな天使なのだ！

……ん？はちみつみたいな天使ってどんなのだろう……？」

思いついた脳みそ花畑がエムを吟じつつ。

クリスのはんびりとピクニックのように家路をゆく。

それにしても今日は暑い。

クリスの白い陶器のような額にも汗が浮かぶ。

（はあ、あともうちよっとだー。

ああ、リリーさんに会うためとはいえ真夏のミサはキツツイなあ……）

会う？

いや、遠巻きにストーキングしてるだけだろ？

などという突っ込みは、きっと姉のアグネスがこれでもか！として

いるだろうから、これ以上はしないであげてほしい。

16歳、クリスのガラスのハートは、真夏の炎天下の薄氷よりも脆い。

めええええーと懐かしい羊の鳴き声が響いてくるとグレイ家の門はもうすぐ、というところで。

クリスは思いがけない光景を目にすることになる。

グレイ家の、ボロすぎてもはや古代遺跡みたいになってしまった石門に寄りかかるようにして、一台の馬車が止まっていた。

それは、あのリリーお嬢様・・・ヘンレイン家の豪華な馬車だった。

ここからもう半刻もゆっくりと進めばヘンレイン家だという妙な場所で、なぜ馬車は止まっているのか？

そんな疑問を浮かべることもできないまま、リリーのストーカーであるクリスはたちまち挙動不審になる。

（リ、リリーさんだ・・・リリーさんの馬車がそそそそこに！）

どどどどうしよう！？

危うく耳のない青いネコ型ロボットを呼びそうな勢いだったクリスだったが、馬車から聞こえてくる若い女性の叫び声にハッとなる。

これは、この美しい声は、間違いなくリリーさんの声。

そして完全に困っている感じ。

クリスは愛しいリリーの声に、ヘタレである我を忘れて馬車の方にひよこひよこよかけよった。

「ばあや、ばあや・・・！っかりなさい！ばあや！」

馬車の中から、リリーの泣き叫ぶ声がする。

「お嬢様……どうなさるんで？お医者を呼ぶにも、ここじゃどうにも……」

お屋敷まではあと半時にもかからない位だし、ばあさんにはもうちよっと我慢してもらって……」

普段はヘンレイン家の牛馬の世話をしている初老の男がリリーをなだめようとするが、パニック状態のリリーは聞く耳を持たない。

「でも……ばあやはこんなにぐったりして、今すぐにも死んでしまいそうじゃありませんの！」

わたくし、わたくし……どうしたらいいの？

もし、ばあやが死んでしまったら！」

いやああ、と泣きくれるリリー。

（リリーさんが泣いてる！なんとかしなきゃ！

いや、でも……僕なんかが声をかけてもいいのかな……ああでも……どうしよう？どうしよう？あわわわわ……）

クリスはしばらく苦悩したのち、しかし、たまりかねて初老の御者に声をかけた。

「あ、あ、あの……どうか……なさったんですか……？」

突然声をかけられた御者は驚いたようにクリスの方を振り向いたが、あきらかに強盗や追いはぎの類ではなさそうなクリスのヘタ……いや、善良そのものの容貌にほっと安堵し、それから事情を簡単に説明し始めた。

馬車で教会から帰る途中、乳母のヨハンナがめずらしく車酔いしたようだと言い出したこと。

口やかましいが、お嬢様大事で忠誠心が強く、我慢強いヨハンナがそのようなことを申し出るなど、よほど気分が悪かったのだろう。

リリーは御者に声をかけ、馬車を止めさせた。

しかし、車酔いを醒ますため外の空気に当てさせようと馬車のドアを開けたところ、急にヨハンナの意識がなくなり今にいたることだった。

「意識が・・・？」

怖々、そつと馬車の中を伺い見るクリス。

リリーに抱きかかえられるようにして、ヨハンナは目を閉じて横たわっていた。

紅潮した顔で玉のような汗をかいているリリーに比べ、ヨハンナの方は血の気もなく、蒸せるような暑さの馬車の中でも汗さえ見当たらない。

色を失った唇。混濁した意識。

(・・・・これは・・・・)

クリスはふと思い至った。

この初夏から時期にかけ、元医学生で簡単な症状なら医者のような真似事もできるサイモンのもとへ、よく近所の農夫が同様の症状で運び込まれる。

「えと・・・あの、僕、ちょっと思ったんですけど、もしかしたらばあやさんは熱中症かもしれません。」

クリスは、御者とリリーに、彼の中では最大限に毅然とそう告げた。

「熱中症・・・ですの？では、わたくし、どうすればよろしいの？
ばあやを、ばあやを助けて下さいませ！」

「あ・・・とりあえず、涼しいところに運んで体を冷やさないといけません。」

僕の家がすぐそこにあります。急いではあやさんを運びましょう！」

もしここで倒れていたのが乳母ではなくリリー本人だったら。

おそらくクリスはリリー同様パニックに陥ってしまい、このような冷静な判断ができなかっただろう。

なにせヘタレ中のヘタレだから。

しかし愛しいリリーのため、クリスは自分にできることを全力でしたかった。

それにヨハンナの具合は、素人のクリスが見てすぐにわかるほど、芳しくはなかったのだ。

迷ったり、びびったりしている暇はなかった。

クリスは、御者に馬車を門の中まで乗り入れるように、リリーに乳母の首までつまった服装をゆるめ下着姿にしておくように言つと、自分の屋敷に飛んで入った。

「サイモン！サイモン！病人だ！」

昼食の準備のためにキッチンにいたサイモンにざっと事情を話すと、サイモンはエプロンを慌ててはずしヘンレイン家の馬車のもとへ駆けて行った。

「こちらへお願いします！」

サイモンは、ヨハンナを初老の御者から受け取り、屋敷で一番涼しい地下のワイン倉に運ぶ。

夏でもそこは一定の温度が保たれ、暑い日中での農作業中に倒れた近所の農夫たちがちよくちよく運び込まれることがあった。

薄い敷布を床に広げヨハンナを横にする。

冷たい井戸水に手ぬぐいをひたし、ヨハンナの体を冷やす。

「ばあや・・・ばあや・・・」

手当てを受けるヨハンナを心配そうに見つめながらしゃくりあげるリリー。

「だ、大丈夫だよ、サイモンにまかせておけば・・・」

サイモンはこういう症状に慣れてるし、そのへんの医者よりよっぽどすごいんだ。

だから、あの、その・・・だから・・・」

しどろもどろになりながらも、リリーを安心させようとするクリス。

「……はい……。ありがとうございます……。あなた様
がいらっしゃらなければ、わたくし……。」

憔悴しきっていたリリーは、自分よりわずかに上背のあるクリスを見上げるとこくと肯き、そのまま頼るよつに身を預けた。

リリーのふわりとした柔らかい髪が、クリスの頬に触れた。

「……大丈夫だよ、リリーさん。ばあさんは絶対助かる。」

クリスは少しためらった後、その華奢な肩を励ますように何度もさすった。

5日間、少女は家を空けていた。

ヘタレ中のヘタレ、キングオブヘタレの弟と、仕事はできるが他人を疑うことを知らない純粋な使用人のサイモンの二人を、あのただっ広いオンボロ城に残していくのは多少心配だったが、

隣国に行商に行く商隊の護衛というオイシイ仕事を断ることはできない。

いつもお世話になってる用心棒ギルドの元締めが、特別に回してくれた割のいいヤマなのだ。

道中出くわす盗賊やらちんぴらの類をちょいちょいと相手するだけで、たんまりと謝礼がもらえる。

今回も思ったとおり楽な仕事だった。

この暑さをのぞけば。

ただでさえ暑いというのに、重い剣を腰に佩き、きつく巻いたサラシの上に男物の服、さらに防護の意味をこめた皮のベスト。

褐色の髪はひつつめて目深にかぶった帽子の中に。

年頃の女の子らしいおしゃれも、化粧ももちろんない。

そして、クソ暑い。

しかし他の用心棒仲間や依頼主の手前、女だとバレるわけにもいかず、我慢する他ない。

女が用心棒のギルドに入るとはまず許されないのだ。

女だとバレた時点で、よくて失業、悪ければ……その後のことは考えたくない。

用心棒を請け負う男たちは流れ者だったりお尋ね者だったり、とにかく荒くれ者たちなのだから。

もちろん剣の腕さえあれば、お互いに過去や身分なんかは詮索されないし、みんな多かれ少なかれ脛に傷持つ身なのだ、

仕事後の付き合いも仲良くなれば一杯、とはなるものの強制ではないし、やりやすい仕事ではあるのだが。

少女の名前は、アグネス・グレイ。

花も恥じらう18歳のお年頃の乙女でありながら、性別を偽って用心棒の仕事をしている。

荒くれ者たちに交じっての危険な仕事ではあるが、少女の収入がなければグレイ家は滅亡だ。

なんで大の男ふたりを抱えながら、グレイ家存続の心配を女の自分がしなきゃいけないのか。

なんでオトコのフリをして用心棒だなんて危険な仕事をしてまで一家の生活費を稼がなきゃいけないのか。

こんなおかしいことはない、とアグネスは心の中で憤慨してみる。

世が世ならアグネスだって公爵令嬢・・・と呼ばれたかどうかはやっぱアヤシイ。

なにせ亡くなった父様だって、公爵のくせにただの剣術バカで、相当世渡り下手だったし。

そもそもアグネスは『たられば』が嫌いだ。

考えたつてお腹が膨れるわけでなし、崩れた石垣の修繕費が出るわけでなし、羊たちの冬の餌代だって。

ともかく稼がなくては。

クリスもサイモンも、アグネスにとって大切な家族、かけがえのない必要な存在であることに間違いはないけれど、それでもあの二人にお金を稼ぐ能力があるとは言いがたかった。

今のアグネスは公爵令嬢ではなく、一家の大黒柱なのだ。

「おい、クリス・グレイ、おまえさんの取り分だ。」

商隊が帰りの荷を解き終わり、元締めがアグネスのもとへ薄汚れた小さな袋を投げてよこす。

男のふりをするに至って、アグネスは弟の名前を使用している。

だから、彼女は、今はアグネスではなく、『クリス・グレイ』。

最近のアグネスの活躍によって、用心棒ギルドの間ではちょっと知られた名前だ。

男にしては華奢な体からは想像もつかないほど華麗で的確な剣さばき。

4、5人の大男に囲まれても、まるで赤子相手かのようにあっさりと伸してしまう。

今やクリス・グレイが同行しているという噂だけで、中途半端な山賊どもはその商隊を襲うことすら憚るとも言われている。

・・・本物のクリス・グレイである弟は、蠅も殺せないような軟な少年なのだが。

「確かに。」

アグネスはそこに入っていた金貨の枚数をすばやく数えると、懐

にしまった。

その重みに心の中でにんまりする。

さすが、儲かっている都の商人は払いがいいわ。

「お頭、また仕事があればいつでも声をかけて下さい。」

「おお、こっちこそヨロシク頼むぜ。お疲れさん。」

「おい、クリス、たまには一杯付き合えよ。」

「ちょっといい娘がいる宿があんだよ。」

若くてカワイイのに、あんなことやこんなことまでしてくれるんだぜ。連れてってやるぞ。」

「あー・・・悪い、ジョン、ギル。今日は帰るよ。こんなに暑くちや女と遊ぶ気にもならない。」

アグネスは自分のことを若い男だと思っている仕事仲間たちの誘いを笑顔で愛想よく断り、さっさと家に向かう。

このお金でしばらくは家族3人、つつましく暮らしていけるだろう。

夕方の小川沿いの道。

アグネスは、数日前にこの同じ道をヘタレの弟がふわふわと軽薄な妄想にふけりながら歩いていったとは知らない。

うん、知らないほうが、お互いに幸せなことってあるよね・・・。

アグネスが生家であるオンボ口城の勝手口にたどり着いたとき、もうすでにあたりは夕闇で暗くなり始めていた。

都に流れる川の中流域、高原のようになってこのあたりは、夕方になり少し涼やかな風が吹き始める。

屋敷の厨房のオープンからは、香草と肉の香ばしい匂いが漂ってくる。

調理しているのはサイモンだ。

グレイ家の使用人はサイモンただ一人なので当然といえば当然なのだが、本来執事であるはずの彼は、庭の手入れから掃除、洗濯、炊事まで一切の家事を担っている。

そのうえ元医学生で病気にも詳しい。

もはや執事というよりは何でも屋。

アグネスの稼ぎも不可欠だが、サイモンがいなければグレイ家は立ち行かない。

嗅いだけで疲れた体に活力を与えてくれそうなその匂いにつられるように、アグネスは厨房に続く勝手口の扉をガチャリと開けた。

きちんとした表玄関は古くなった扉の立て付けが悪く出入りしづらいという事情ももちろんあるのだが。

「ただいま、サイモン。」

「ああ、お嬢様。お帰りなさいませ。もうすぐ夕飯のご用意ができますよ。」

お飲み物はこちらに用意してございます。この暑さではさぞお疲れでしょう。」

透けるような色素の薄い金色の長い髪、ひょろりと高い背の好青年。知性と優しさを感じさせる深いブルーの瞳の持ち主のサイモンは、フリフリリースのエプロン姿でこちらを振り返ると、ご近所で『ババ殺し』の異名をとる人の良さそうな笑顔を浮かべた。

テーブルの上には、あらかじめ告げてあった帰宅時間に合わせて用意された飲み物。

いつものことながら完璧な気遣いだ。

「ああ、ありがとう、サイモン。……頂きます。」

よく冷やされたグラスのミントティーを一気に飲んだアグネスは、体中の熱気を放出するかのようにはあ、と豪快な息を吐いた。

それから熱のこもった帽子、ベストを次々とはずし、シャツのボタンをぶちぶち開ける。

靴を床に放り投げて裸足になり、ひつつめた髪をふわりとほどくと
アグネスはようやく生き返った気がした。

「お嬢様、はしたないですよ。」

たしなめるサイモンに向って、アグネスは唇をとがらせた。

「だって尋常じゃなく暑いんだもの。疲れてるんだもの。お腹が空
いてるんだもの。」

女の格好のままで仕事ができればもう少しくらいはマシなんだろう
けどね。」

「・・・ああ、確かにそうでございますね・・・申し訳ございません。

私にもう少し甲斐性があれば、お嬢様にこのような危険な仕事など・
・・・」

へらを片手のエプロン姿で、ずーんと落ち込むサイモン。

しまった。

仕事の愚痴はたとえ軽口でもサイモンには言ってはならないのだっ
た。

サイモンはお嬢様の危険な日雇い仕事には元々大反対で、かといっ
て自分にそのようなお金を稼ぐ能力があるわけがなく、そんな己の
無力さ加減に無限ループの自己嫌悪へと一直線に陥ってしまう。

アグネスは慌てて首を振り否定する。

「い、いや、あのね？違うのよ、そんなこと言っていないわよ。」

そもそも男みたいで美人でもないし頭もよくない私の唯一の取り柄は、剣を振るうことくらいなんだし。」

「そんなことはございません！お嬢様はとても聡明でお優しく、美しい方です。」

私の自慢のお嬢様です。」

真顔で否定するサイモン。

彼はとても忠誠心に厚い人間なので本気でそう思い込んでいるらしいが、美しいお嬢様が男のフリをしてバレないはずがない。

よく日焼けしてそばかすの多い肌。

瞳も髪も暗褐色で凛々しい顔立ち。

体つきは細いが筋肉質で、剣を持つ掌は女のものとは思えないほど固い。

アグネスは自分の容姿についてとてもよく理解していた。

南大陸にルーツを持っていた母親によく似ているが、エキゾチック

で妖艶な美女だった母とは何かが決定的に違う。

剣で鍛えすぎたせいだろうか？

それとも胸がなさすぎるせい・・・？

一方、グレイ家の美形の血を濃くひいたクリスは全身の色素が薄く、それこそ深窓の令嬢といった容姿をしている。

お互い生まれてくる性を間違えたのかもしれない。

コンプレックスではないと言えば嘘になるけれど、しかし、だからといってアグネスは無理に女の子らしくなりたいたったこともない。

自分は自分でしかないのだから。

「ありがとう、サイモン。でもいいのよ。私は本当にこの仕事を好きでやってる。本当にほんとよ。」

むしろお給料も払えないのに、私たち姉弟ここまで尽くしてくれてるサイモンには感謝しても仕切れないくらいだわ。

本当は立派なお医者様になるはずだったのに、私たちのところへ戻ってきてくれて。

だから、気にしないで？ね？」

必死に笑顔でとり繕うと、サイモンはようやくこくりと肯いた。

「・・・・・・・・はい。わかりました。」

では、お疲れのところ申し訳ありませんが、今日はお客様がいらっしやっておりますので、

早めに着替えて下さいますか。

お部屋に、奥様が生前着ていらしたお洋服を仕立て直して置いてございますので。」

そうだ、サイモンはお針子仕事までできてしまう。

完璧な使用人なのだ。

お金が稼げないくらい、善人すぎてすぐ騙されてしまうくらい、何だっていうのだ。

いや、違う、問題はそこではない。

「・・・・・・・・お客様？」

アグネスは驚いてサイモンに聞き返す。

「はい。グレイ家にお客様がいらっしやるなんていつ以来でしょうか。」

ご夕食を召しあがって頂くようお誘いしたのですが、私などの作った料理がお客様のお口にあうかどうか。

あとでお嬢様にお味を確認していただいてもよろしいですか？」

敷地内の畑で採れたレタスをサラダ用にちぎりながらサイモンはうなづく。

どこことなくウキウキしたその様子にアグネスはますます訝る。

サイモンは使用人としてほぼ完璧な能力を有している。

しかし、残念ながら門番としてのスペックだけは著しく低く、うっかり誰でも入れてしまうのだ。

そしてご丁寧にもおいしいお茶までふるまって、もてなしてしまう。たとえ相手が泥棒であろうとも。

そのため、グレイ家以外のお金持ちの家では、この使用人としての素晴らしい能力を発揮することもできない。

グレイ家には盗むようなものなどないからいいのだが。

「いや・・・味見はいいけど。あの、で、誰が来てるの？」

「いつぞやの、我が家に財産があると思い込んでやってきたアホな詐欺師みたいな人？」

それとも、隣の村の修道院の院長様が、オリーブ畑とブドウ畑を寄付するように言ってきた？」

「あ、まさか、またサイモンに親戚のひとから婿養子の話が・・・！？」

「ご近所の農家の人がちよくちよく遊びにやってくることをのぞけば、父の死後この荒れた屋敷に他人がやってくるなどめったにない。

今までの前例は全部ろくでもない客ばかりだった。

「あ、ちがうのよ？ちがうの、サイモン。」

「あたしもクリスマスもサイモンがお嫁さんをもらうのが嫌なんじゃないの。」

「ただ、今サイモンがいなくなるとちよつと困るっていうか、もうちよつとだけ待ってほしいっていうか。」

話が少しおかしな方にずれてきたアグネスを見て、サイモンは笑顔

で首を振る。

「違います。私のお見合いの話ではありませんよ。

私はお嬢様とクリス様にお仕えすることが一番の幸せですし、あれ以来お見合いはこりごりです。

お客様はクリス様のご友人の方です。」

「は？クリスの友達？……鳥でもきてるの？」

「いえ。鳥のお客様では、七面鳥の香草焼きはお出しできませんね。」

サイモンは大まじめに答えた。

「じゃあ誰だろう。」

七面鳥の香草焼きを食べるくらいだから、人間なのだ。

でもクリスの友達なんて聞いたことがない。

身分の高さを理由に、普通の学校に通うこともできなかったアグネスとクリス。

この国では上流階級の子弟は家庭教師につくのが当たり前だから。

グレイ家には家庭教師を雇う余裕などないので、この役目ももちろんサイモンが勤めている。

しかしサイモンはかつて医者を目指して町の医学校に通うエリート学生だったのだ。

いろいろな事情のせいで道半ばで医者諦めることになったとはいえ、サイモンは多くの高度な知識を有している。

家庭教師として雇うとしたら、多くの賃金が必要なほど優秀な人材だ。

そう、サイモンはパーフェクトな使用人なのだ……

って、またまたそんな話ではない。

学校に通うことのなかったクリスやアグネスに、同年代の友人などほとんどない。

ただ、公爵家の敷居の高さなどグレイ家には微塵もないので、アグネスはご近所の農家の子供たちと気安く話はするものの、

ヘタレでビビりで内向的なクリスに小鳥さん以外の友人がいたなんて。

まあでも、見目がよくおとなしいクリスは、おばちゃまやおばあちやまたちには『かわいらしい』と人気がある。らしい。

早くに母を亡くしたことも関係あるのか、クリスも中高年の女性にはよくなつく。

「じゃあ、どこかのおばあちゃまでも？」

怪訝な顔でたずねたアグネスに、サイモンは答えた。

「いえ、とてもお若い方ですよ。」

ほら以前からクリスマス様が想いを寄せていらしたヘンレイン家のお嬢様、

リリー・ヘンレイン様です。」

7（後書き）

こんなところまで着いてきて下さってる方はいらっしやるのでしょうか・・・なんか1話ごとの長さがマチマチですみません。ケータイ小説用に作ったもののコピペで、読みにくいかとは思いますが、できるだけ改善していきたいと・・・（汗）ちなみにやたらと隙間や句読点が多いのは、私が老眼だからです。ごめんなさいー

「・・・・・・・・・・なに・・・・・・・・・・あれ。」

「とてもいい雰囲気です。お似合いのお二人です。」

絶句するアグネスに、にこにこ笑顔のサイモン。

アグネスの視線の先には、サイモンが世話をしているバラやゼラニウム、クレマチスなどの色とりどりの花々が咲き乱れるグレイ家のパティオを散歩する若い男女の姿。

男の方はもちろん、白い陶器のような頬を紅く染め、鼻の下をだらしなくのばしているクリス。

そして、女の方は。

「なんで。なんでヘンレイン家のリリーお嬢様がうちに・・・・・・・・・・クリスと一緒に・・・・・・・・・・。」

え？クリスが長年のストーキングの末、とうとう頭がイカレて誘拐してきたとか。」

いや、そうだ。そうに違いない。

あの。あの、聖マルコ有数の商人、ヘンレイン家の一人娘で、美人

で品行方正で、いろいろなお金持ちや貴族からお見合いの話が絶えなくて、それだけ有名人なのに悪い噂などひとつも聞いたことがない、

あの、リリー・ヘンレインが。

ふにゃふにゃヘタレの愚弟と、グレイ家の半遺跡化したボロ庭を歩いているなんて。

誘拐でなかったらなんなのだ。

これは夢か。

そうだ、自分は5日間にも渡る仕事の後で疲れているんだ。

これはきつと夢幻。現実の世界に帰らなくちゃ・・・

アグネスがうつろな目で自分のおでこを傍の石壁にぶつけようとしたその時。

「うわっっっ・・・」

クリスが浮かれすぎて石畳の段差に躓き、アグネスの代わりにおでこを強打した。

「大丈夫ですか、クリス様？」

たらりとおでこを流れる血を、リリーが慌ててハンカチを出して心配そうにぬぐう。

高そうなレースの白いハンカチ。

血液染みは落ちにくいだよ、もったいない！あの愚弟のおでこなど雑巾で十分なのに！

「だ、だ、大丈夫です。こ、これくらい、なんてことないですっ！」

物陰で伺う姉の心の叫びなど届かず、クリスは嬉しさのあまり感極まってうるうるした目でリリーを見つめる。

そんなクリスを恥ずかしそうに頬を染めて見つめ返すリリー。

完全に、世界は二人のために……。

お客様の正体がリリーお嬢様など信じられず、確認するためにサイモンに案内されてわざわざパティオまでやってきたアグネスだったが、

そこにいたのは、まぎれもなく、クリスが長年遠巻きにストーキングをしながら叶わぬ片思いを抱えていた相手、リリーお嬢様だった。

しかも、クリスと友人、というか、もはやこれは。

「なんで、ちゃっかり、あんなことになってんの？」

完全に、アツアツのバカップル状態。

純情な二人はまだ手もつなげないようだが、それが逆に傍目には二人の初々しい関係を見せ付けている。

「ですから、先ほどお話しましたように、リリー様の乳母ヨハンナ様が、熱中症で――」

「いや、もうそのくだりは聞いたから。そういうことじゃなくて、よ。」

教会のミサの帰り熱中症になってしまったヨハンナを、偶然通りかかったクリスがうちに連れてきて、サイモンに診せた。

脱水をおこしてかなり危ない状態だったヨハンナは、サイモンの機敏な対応によって難なきを得、大切な乳母を助けてくれたクリスにリリーは泣きながら何度もお礼を言って帰っていった。

のが、アグネスが商隊の用心棒の仕事で家を空けていた3日前の話。

そして、今日改めてお礼にやってきたらしいリリー。

もちろん、乳母のヨハンナも一緒に、お礼の品やらなにやらもわざわざ届けてくれた。

割るのが恐ろしくて絶対使えない超高級なティーセットとか。

どんな味がするのか想像すらつかない高級食材の瓶詰セットとか。

それでこちらにもサイモンが気を回して、せっかくいらっしやったの

だから夕食でも一緒にどうですかとお誘いした。

リリーは同じ年のクリスと話はずみ、夕食ができるまでの間、庭を散歩したり書庫で本を探したり。

まあそこまでは、100歩譲ってまだわかる。

わかるのだ。だがしかし。

「なんであのリリーお嬢様がクリスなんかに！？熱中症のヨハンナを實際助けたのはサイモンでしょ。」

クリスはただ連れてきただけじゃないの。」

サイモンならともかく、あの弟に惚れるとは……。

非の打ちどころがないと評判だったリリーだが、実は男の趣味だけはものすごく悪かったのだろうか。

そもそも私が必死こいて出稼ぎに行ってる間、あの愚弟はいつたい何をやってるの？

ふるふるとこぶしを震わせて怒るアグネス。

「キーツ、なんなの、あのダラシナイ顔は！後で剣稽古につき合わせて久々に鍛え直してやる。」

クリスなんかギッタギタのメッタメタにしてやるんだから！」

それをサイモンはまあまあとだめて。

「し、しかしお嬢様。よくよく考えれば、これはいい機会なのではないでしょうか。」

「なによ、いい機会って。」

「考えてみてください。お相手はあのヘンレイン商会のお嬢様ですよ。」

もしうまくいけば、クリスマス様はいわゆる『逆タマ』というものに乗れるのでは？」

サイモンのその一言に、アグネスはハツとした。

逆・玉の、輿。

そうだ。

リリーは大金持ちの娘。

もし、万が一、この先、クリスがリリーと奇跡的に結婚でもしてしまえば。

グレイ家はヘンレイン家と親戚ということになるう。

そうなれば、この屋敷だつて嫁入りしてくるリリーが住むにふさわしいものに改築されるであろうし（もちろん費用はヘンレイン家もち）、ヘンレイン家のお嬢様の夫が無職のニートだなんてこと許されるはずもなく、クリスにはなんらかの職が与えられるであろう。（たとえ名ばかりの役名であつたとしても）

得られるものは、アグネスが用心棒仕事でちまちまと稼いでくる額の比ではない。

『キングオブヘタレ』、『ごくつぶし』、『ぼっち公爵』、『ロイヤルニート』などなど。

ろくでもない称号ばかりを欲しいままにしてきたクリスに、一生に一度あるかないかの一発大逆転満塁ホームランのチャンスがやってきたのだ。

「サイモン……」

「はい、お嬢様。」

「・・・あなたの言ったとおり、これは、グレイ家に訪れた最後のチャンスかもしれない。」

低い、アグネスの声。

「あの、お、お嬢様・・・？」

自分が放った何気ないクリスへのフォローが、アグネスの何かを目覚めさせてしまったことに気づき、サイモンは思わずごくりと息をのむ。

「あのね、私は、父様が亡くなってクリスが当主になったあの日から、グレイ家はあたしたちの代で滅びるものだと思ってたの。」

そりゃあクリスはヘタレだけど、それなりに気が優しくて見た目もそこそこいい。頑張れば、彼女の一人くらい奇跡的にはできるかもしれない。

でも・・・でも、恋愛と結婚は別、こんな貧乏な家の当主にお嫁さんがくるようなことはこの先何十年たつてもないに決まってる。嫁げば、苦勞することは目に見えてるんだもの。

しかも、自分で食べていけるような甲斐性もあの子には皆無。だから、私が少ないながらも外でお金を稼いでグレイ家を支えなきゃって。

・・・でもそれでもいい。サイモンとクリスと3人、ひっそり

楽しく暮らしていければそれでいい。

でもね。」

そこでアグネスはいったん言葉を切ると、カッと目を見開き、サイモンの肩を掴んで勢いよくぐらぐら揺すった。

「でも、腐るほどお金が余ってるヘンレイン家のお嬢様なら話は別よ！……！！

もし、クリスがリリーお嬢様と結婚なんてことになったら……これで私もクリスも一生安泰！

ヘンレイン家からきつと腐るほどメイドさんが送り込まれてくるわ。

そしたらサイモンだって、もうこんな貧乏な家で使用人なんてしなくてもいい！医学校に戻って医者になる夢だって叶えられる……！！」

「お、お嬢様、私はもう一生ここでお二人にお仕えする決意で……

——」

「何言ってるの！

サイモンみたいな優秀な人の将来を奪ってしまつて、私は本当に心苦しかった。

だからいつかは、なんとかサイモンを医学校に戻してあげたい、そう思ってたの。

それに私だって、いつまでも女だということを隠して盗賊やならず者と戦ってるわけにはいかない。

「……用心棒の仕事は決して嫌いじゃないけど、一生できる仕事じゃないのはわかってる。

だから。」

アグネスはサイモンの手をとる。

「これは、神様がグレイ家に下さった最後のチャンスなのよ。なんとしてでも、クリスにはあの子と結婚してもらう。………いいわね？サイモン。」

すわりきった目で自分を見上げる元公爵家の令嬢。

その迫力に、

「え、あ、は、はい。もちろんです、お嬢様。」

サイモンは少し引きつった顔でこくこくとうなずいた。

（……しまった……お嬢様には、少し苦勞をさせすぎたのかも
しれない………）

たしかにアグネスは世間の荒波に揉まれ過ぎた。

お金に困り、生きていくのに仕方がないことだったとはいえ、得体のしれないむさ苦しい男どもと一緒に剣を振り回し、大きな怪我はま

だないが、いつも生傷は絶えず。

（旦那様がご存命だった頃のお嬢様は、剣の腕前こそ成人男性を軽く倒せるほど優れていたものの、恥ずかしがり屋さんで大人しくて、貧しくとも気品あふれる正真正銘のご令嬢だったはず。）

それがいまや……。

やはり、アグネスに用心棒などというトンデモナイ仕事をさせてしまったことをおおいに後悔した、

サイモン、24歳の夏だった。

その夜、夕食を終えリリーが帰宅、グレイ家がひと時の賑わいから元の静けさに戻った後。

中庭で青白い月に照らされながら、ひとり日課の剣稽古に汗を流すアグネスの姿があった。

クリスの逆タマうんぬんも、半分・・・いや、3分の2くらいはもちろん本気だけれど、実際どうなっても家族を守っていくのは姉である自分だという自負がある。

とりあえず、今のアグネスにできることは、剣の腕を磨き、用心棒の仕事続けることくらい。

ヘタレとはいえ、クリスはアグネスにとって唯一の肉親で、自分が母親代わりになって育ててきた弟なのだ。

そのクリスに初めて、かわいらしい恋人ができた。できればうまくいってほしい。

そう思うのは、相手が大金持ちの娘でなくとも同じことだ。

しかしグレイ家はこの惨状。相手は、国一番の商人の娘。

結婚まで、そうすんなりとうまくいくはずはない。

アグネスもそれはわかっていた。でも。

クリスだって、なんだかんだ言っても生まれてこのかた苦勞ばかりしてきた。

早くに両親を亡くし、あまり恵まれた境遇とは言いがたい。

元公爵家という肩書きさえなければ。

こんなだっただけで何の役に立たない城なんか相続してなければ。

領主として領内の農家にアレコレと世話を焼く必要もなければ。

もつと普通の少年として、ヘタレなりに幸せな普通の人生を送れていたかもしれない。

もしくは、自分の容姿がクリス並みに良く、素敵な大金持ちから求婚されていれば、このように明日食べるパンにも困らずに済んだだろうに。

そんなことは考えてもどうしようもないことではあるが。

(・・・どうか、クリスの初恋が、うまくいきますように。)

こっそり弟の幸せを願いながら、アグネスは剣を振った。

「あらいやですわ、クリスマス様。ほっぺにクリームがついていらっしやってよ。」

「え、嘘、どこどこ?」

「わたくしがとって差し上げますわ。」

リリーはくすくすと笑いながら、ハンカチでクリスの頬を優しく拭く。

あ、ありがとう、なんて、でろーんとした情けない顔でにやつくクリス。

それを見て、領地の農民からの苦情（グレイ家の野良羊が畑を荒らした）やら、今年のぶどうの生育具合やら、テーブルの上でせつせと書き物をしていたアグネスのこめかみに、ぴしりと青筋が浮かぶ。

（このバカっプルめ・・・）

リリーが初めてグレイ家にやってきてから、ひと月あまりが経とうとしていた。

あれ以来、クリスとリリーは順調に愛を育んでおり、ほぼ毎日のようにクリスに会いにやってくるリリー。

たしかに、多少リリーのバックグラウンドに目が眩んで、この恋をクリスに進めたのは自分だ。

しかし、こつも毎日目の前でいちやこらされてしまうと……

しかも、今アグネスがやっているのは、本来クリスがやるべき当主の仕事なのだ。

父が亡くなった4年前から、クリスが18歳になるまでは、と、今は2歳年上のアグネスが代わりにしているのだが。

(……って、私は14の時からやってるつつの！)

当主の仕事も、用心棒の仕事も、アグネスはこの4年間必死にやって、ようやく一人前になりつつあるのだ。

そんな姉に守られてきたクリスは、ほけほけと暢気に育ち、体ばかりいっちょまえの、何もできない16歳男子になってしまった。

(わ、私の教育が間違ってたせい……？)

いや、父様がいらっしゃった頃から、この愚弟はこんな調子だったわ。

アグネスは心の中でクリスをしばきつつ、引きつった笑顔でリリーに微笑みかける。

「ねえ、リリーさん、もうそろそろ、暗くなってくるわ。あんまり遅くなるとおうちの方も心配なさるでしょう？」

あなたはヘンレイン家の大切なお嬢さんなんだから。」

やんわりと帰宅をすすめるアグネスのその言葉に、お目付け役として毎日グレイ家にきては、このバカップルを見守らなくてはならない乳母のヨハンナもほっとしたように同意する。

「そうですよ、お嬢様。今日は旦那様と久々にご夕食を一緒にとられるお約束じゃございませんか。」

あまり遅くなると、クリスマス様のご印象までお悪くなってしまう。それでもよろしいのですか？」

「クリスマス様のご印象が？まあ、それは大変。」

ヨハンナに言われて、リリーはハッとされたように席を立つ。

「クリスマス様、そういえば今日は父がなにやら話があるとかで……。夕食を一緒にと約束しているのです。」

お名残おしゅうございますが、もうそろそろお暇しなければ。わたしはまだまだこちらでクリスマス様とご一緒したいのですが。」

「僕もだよ、リリーさん。でも、お父様との約束だからね。気を付けて帰るんだよ。」

「はい、ありがとうございます。」

明日は、ダンスの先生が午前中にいらっしやいますので、それが終われば……

午後のお茶の時間くらいには、こちらにうかがってもよろしいですか？

おいしい焼き菓子を持ってまいりますわね。きっとサイモンさんの淹れて下さる紅茶に良く合うと思いますの。」

「ほんと？楽しみだ。」

「そのうち、わたくしの家にも遊びに来て下さいましね。」

今日の夕食の時、わたくしから父に、それとなくクリスマス様のお話もしてみるつもりですし。」

「え！？ば、僕の？う、うん。わかった。お父様によろしくね。」

・・・帰ると決まってから、何度も手を握り合う二人。

結局、席を立つてから、15分以上別れを惜しみあい、リリーはヨハンナに引つ張られるようにして帰っていった。

だらしないにやけ顔をしてエントランスでいつまでもリリーを見送るクリスの後ろ頭を、アグネスは思わずぱしんと叩く。

「いたつ・・・姉さま、何するのさ！」

「何するのさ、じゃないわよ・・・」。

ほら、うちもご飯の用意よ。今日はサイモンが診療所にお手伝いに行ってるんだから、あんたが下ごしらえの当番でしょうが！」

「あ、そうだった。でも、なんかさあ、もうリリーさんの顔見られるだけで、僕おなかいっぱいで。」

ああ幸せって、こういうことを言うんだね、姉さま。」

「………あ、そう。よかったわね……」

空中のあらぬ方向を見て、リリーとの逢瀬の余韻に浸るアホ弟。

アグネスは頭を抱えた。

・・まあ、いいか。

何かちょっと（いや、かなり？）釈然としないけど、クリスが幸せならそれで。

「ほら早く、厨房に行く。あたしも手伝ってあげるから！」

「うん。ありがとう、姉さま。」

るんるんと鼻歌交じりに厨房に向かうクリス。

しかし。

このように幸せの絶頂だったクリスに、急転直下、青天の霹靂の出

来事が訪れるのは、翌日の午後のことであつた。

次の日。

昨日約束したとおり午後のお茶の時間にヨハンナを伴ってやってきたリリーだったが、その明らかに泣きはらした赤い目、青白い顔に、何かがあつたことは一目瞭然だつた。

「ど、どうしたの、リリーさん・・・？」

おそろおそろ尋ねたクリスの胸に、リリーはわっと泣き伏しながら倒れこんだ。

「リ、リリーさん・・・！？」

「・・・ひくっ・・・クリス様・・・クリス様・・・
っ・・・！」

「ねえ、どうしたの？何があつたの？僕でよかつたら何でも力になるから、話してみて？ねえ、リリーさん？」

クリスが一生懸命なだめてみても、リリーはいつそう泣きじゃくるばかり。

「クリス様、こんなところではなんですから、お部屋のほうに。リリー様が落ち着かれますように、私はカモミールティーを持ってまいります。」

エントランスで出迎えしをていたサイモンが、クリスに言う。

「うん・・・わかった!」

「クリス、リリーさんをこっちへ連れてきてあげて。ばあやさんも一緒にどうぞ。」

隣で見えていたアグネスはクリスを手伝い、歩くのもやっとのリリーをようやくサロンへと連れて行き、古いながらもきちんと手入れされていたマホガニー製のカウチへと座らせる。

それでも、リリーはただただ涙を流す。

「いったい、どうしたっていうの?何があつたの?」

このままでは埒が明かない。

アグネスは、リリーの後ろに心配そうに控えていたヨハンナに尋ねた。

「・・・実は、昨晚の夕食時、旦那様からお嬢様にお話がありました。」

言いくそくに、重い口を開くヨハンナ。

「ヘンレイン氏から?」

「はい。その席で、旦那様はお嬢様に・・・」

「リリーさんに?」

「ある方とお嬢様の、ご婚約が決まられたと。」

「えっ・・・婚・・・約・・・？」

思わず絶句したクリスは、そのまま手に持っていたカモミールティーのカップをガシャンと床に落とした。

ばらばらになって散らばる白い陶器の破片たち。

「クリス様、大丈夫ですか！？」

サイモンが慌てて熱いお茶のかかったクリスの足を湿らせた布で冷やす。

アグネスは床に散らばったカップの破片を集める。

しかし、呆然としてしまったクリスの反応は鈍い。

まるで、砕けてしまったのはクリス自身の心そのものであるかのようだった。

それも仕方のないことかもしれない。

リリーと知り合って一月あまり、幸せの絶頂にいたクリス。

長年の片想いが、ようやく奇跡的になったところだったはずなのに。

石像のように固まってしまったクリスの向かいのカウチでは、愛しのリリーがさめざめと涙を流しながら、ヨハンナに慰められている。こちらも、まるでこの世がまもなく終わってしまうかのような落胆振りだ。

絶望に打ちひしがれる若い恋人同士を目に、アグネスは、はあと軽くため息をついた。

「まあ、リリーさんにそういう話がないほうがおかしいわよね。

ヘンレイン家のお嬢様でこんな可愛らしい方なんだから、お見合いの話なんて今までもたくさんあったんでしょ。

でも、婚約が決まった、とはずいぶん突然ね？お相手はこのどなたか、お聞きしてもいいかしら？」

「……はい。旦那様は以前から、お嬢様に、ご身分の高い方とのご縁談を探しておいででした。

ヘンレイン家は、商人のお家。このようなことを乳母の私の口から言うのはどうかとは思いますが、どれだけお金はあっても、やはり貴族ではございませんでしょう？ですから……」

「ああ、そうね。王政が終わったとはいえ、まだまだ爵位を欲しがる人はたくさんいるわ。

父が死んだ後、私もそれだけで田舎の金持ちの中年オヤジに売られそうになったもの。」

一見親切な顔をした遠縁の親戚に金の代わりに売られそうになった
14歳の時のおぞましい体験を思い出し、アグネスは身震いする。

それを助けてくれたのは医学校を辞めて帰ってきたばかりのサイモンで、アグネスはその事件以来、自分の力のみで生活費を稼ぐことを心に誓っている。

家族以外誰も、信用してはいけない。

「そうなのです。お嬢様のご結婚により、ヘンレイン家に貴族の血と爵位を、と。

それで、伯爵であるクレモン家のご当主様で、現在上院議員をつとめていらっしゃるパーシヴァル・ド・クレモン様とのご婚約を決めてしまわれたようなのです。」

伯爵、パーシヴァル・ド・クレモン卿。

社交界になど縁もゆかりもないアグネスには、その名前にももちろん聞き覚えはなかった。

しかし、王政が終了した後も、議会に進出したり、商売をしたり、コネやらなにやらでうまく生き残った一部の貴族たちが、以前の既得権益を守って上流階級をいまだに形成し続けていることは知っていた。

その一方で、グレイ家のように世間から忘れ去られ、一般庶民以下の暮らしになってしまった没落貴族も大勢いるのだけれど。

ただ、共和政開始からまだ50年あまり。

何百年も続いてきた身分制度は根強い。

そして、グレイ家が元公爵家という事実もまた変わりはない。

結婚の申し込みというものは昔から、より高い身分の者が優先されるのが当たり前だ。

伯爵と婚約が決まっていようが、王家や公爵家からの申し出があれば蔑にできるものではない。

もちろん、アグネスもこんなところで元公爵を主張するのはどうか

と思ったが、普段はマイナスにしか働かないこの身分、ここで使わずしていつ使う？

恥も外聞も矜持もない。

可愛い弟の初恋がかかっているのだ。

あと、このボロ屋敷の修繕費。

「ということは、身分さえあればいいのよね？ だったら、うちのクリスでもいいんじゃない？

うちは見てのとおり没落貴族だけれど、腐っても公爵家よ。傍系とはいえももとは王家と血の繋がりがあある。ヘンレイン氏が求めてらっしゃるものが身分だけなら、伯爵家より格上。

私はそれにどんな価値があるのかなんて全然わからないけど、ヘンレイン氏のようなご商売をなさっている方には、意味のあるものなんでしょう？

爵位が高ければ高いほど信用度が増すと、世の中の人はいまだに思っているらしいし。」

「そうなのですわ、ですからわたくし父に申し上げたのです。

わたくしの愛するクリス様は、クレモン伯爵様よりご身分のお高い公爵様なのです、って！」

ヨハンナにしがみついて泣いていたリリーがむくりを顔を上げ、悲

壮な顔で訴える。

「でも、父は、社交界でグレイ公爵なんて聞いたこともない、偽物に違いないと申すのです。

クリス様は、身分を偽り、わたくしを騙してヘンレイン家の財産を狙っている輩なのだと・失礼なことを！」

「え、ぼ、僕がそんなことするはずないじゃないか、リリーさんがびーん、とショックを受けるクリスの隣で、ああ、たしかに、とアグネスは冷静に思った。

グレイ家の名は、社交界どころか、今では国会図書館の貴族名簿に載ってるかどうかすら怪しい。

昔は、公爵家としてその一番最初の頁に名を連ねていたのだけれど。

また、爵位の信用度の高さを逆手にとる詐欺師が横行していることも事実だった。

リリーのような『オイシイ物件』となると、実際にそういうことが何度かあったのだろう。

ヘンレイン氏の心配はもつともなことだ。

「大丈夫、うちは正真正銘の公爵家よ。偽物なんかじゃないわ。

なんだったらうちに来て調べて下さっても構わない。」

本物の公爵家だとわかれれば、ヘンレイン氏はクリスとのことを考え直してくれるかもしれない。

ヘンレイン商会は、貴金属、宝飾品を扱う商いで財をなしてきた。

そのため、顧客のほとんどは貴族が占める。

旧制度を重んじる彼らの手前、公爵家からの求婚を無碍にすることはできないはずだ。

しかし、そうは言っても相手のクレモン伯爵は、現在も権力をもつ議員。

なかなかの強敵だ。

クリス自身からは公爵のオーラなんて微塵もないし・・・。

うちにあるもので、もっと他にヘンレイン氏の興味を引くような物はないだろうか。

「ああ、そうだ、その昔、王家から下賜された『王妃の指輪』を、証拠の品としてお見せしたらどうかしら。

あれは我が家で唯一、伝統ある公爵家らしいものだし。きっと宝石のご商売をなさっていて高価な物を見慣れていらっしゃる方なら、価値はすぐに分かって頂けるはず。

サイモン、父様の書斎から持ってきてくれる？」

「かしこまりました。」

アグネスの指示に従い、機敏な動きでサロンを出ていくサイモン。

その後姿を見送りながら、クリスがきよとした顔をする。

「・・・姉さま、『王妃の指輪』ってなに？」

「あれ、クリス覚えてないの？」

「え、そんな話聞いたことないけど・・・」

「そっか。私たちが父さまにその話を聞いた頃は、クリスはまだ小さかったものね。」

王妃の指輪は、公爵の身分とともに、『グレイ家で使いみちのない高級品ベスト3』に入る品物だ。

王様から頂いたというだけに高価な物に違いないのだろうけど、その分、気軽に売っ払うこともできない。飢えたときに食べることもできない。

ある意味、何の役にもたたない物。

そのため、アグネスの中で大事な物だという意識が希薄になってしまっていた。

今回のリリーの件がなければ、ヘタしたら、このまま思いだす機会もなく埋もれてしまっていたかもしれない。

「お嬢様、お持ちいたしました。」

まもなく書斎から戻ってきたサイモンが、サロンのテーブルの上に
恭しくそれを置く。

一目で高価な品とわかる、繊細な貝細工のケースに入った紅輝石の
リング。

アグネスは自身もすっかり忘れていたその存在について、一同に説
明し始めた。

「これは、何代か前のグレイ家当主の娘が時の王の目に留まり、王
妃になった時に頂いたものよ。」

この指輪は、代々正妃の指に嵌められていた神聖なるもの。

残念ながら娘は王宮入りしてすぐに病で亡くなってしまったのだけ
ど、娘を心から愛していた王は、新しい妃をもらってもこの指輪は
娘のものだとして、その亡骸を納めた棺にこっそり埋め込んでしま
ったわ。

だから、それ以後の王妃が嵌めていた指輪はその際に新しく作られ
たもので、ひそかに本当の王妃の指輪ではなかったの。

これが、本物の王妃の指輪。きちんと、証拠の書類もあるわ。

今は王家すら廃止されてしまったけれど、グレイ家が公爵家の中でも王家と特別な関係にあったという印。

いつのまにか棺からはずされ、グレイ家のお守りみたいになっていたのだけどね。」

アグネスは、リリーとヨハンナの手前、いかにももっともらしく話してみせた。

お守りも何も、亡き父の書斎の片隅で埃をかぶって忘れ去られていたことは内緒だ。

「素晴らしい品ですわね！クリス様のご先祖様は王妃様でいらっしやっただのね。」

道理で、クリス様からも王族のような気品を感じるはずですよ。」

指輪の美しさに魅了されたように、きらきらと瞳を輝かせて言うリリー。

指輪は、リリーにとっては、クリスとの未来への希望の小さな光でもあるのだろう。

「そ、そうかな。えへへ。」

さっきまでリリーの婚約話で真っ白に燃え尽きていたくせに、急にデレデレし始めるクリス。

しかしそのズボンの股はこぼしたカモミールティーで濡れたままだ。

恋は盲目。気品って一体なんだっただけ。

「お姉さま、少し手にとって見せて頂いてもよろしいですか？」

「あ、う、うん、いいわよ。どうぞ。」

アグネスから指輪を受け取ると、リリーはお嬢様といえどさすがに商人の娘らしく、その価値を確かめるように指輪をあちこちの角度から見まわした。

「作られた年代などから考えても、おそらく本物ですわね。この大きさの紅輝石は今ではもう採れませんもの。」

台座には、かつての王家の家紋、イリスの花があしらわれておりますし。当時の王家の資料などがあれば、裏付けはとれるでしょう。

「……あら、お姉さま、このリングの内側に刻まれた文字は、何を意味しますの？」

「え？文字？」

慎重な手つきでリリーから返された指輪、アグネスはその内側に目をやった。

小さな刻字は長い年月を経て薄れ、かなり読み取りにくくなっていた。

必死に目をこらす。

「・・・・・・w・・・・32・・・・1かしら、7にも見える・・・・4・・・・
SPI・・・・NE・・・・」

サイモン、見てこれ。何か知ってる？」

「はい、失礼いたします。」

リングの内側に、文字が刻まれているなど今初めて知った。

アグネスは父からは何も聞いていなかったし、父も、この刻字について知らなかった可能性が高いだろう。

「何かの暗号、いや年号でしょうか。」

SPIINEは背骨という意味ですが、何かの固有名詞かもしれませんし。

何でしょうね。申し訳ございません、私にもわかりかねます。」

目を細め、難しい顔をしてサイモンが続ける。

「ただ、これは、私の勝手な考えですが、文字はグレイ家にやってくる以前に、刻まれたのではないでしょうか。」

なにしろ王家の指輪ですから、もしかしたら、王家の隠された財宝の在処などを示す暗号かもしれません——」

「財宝!？」

言葉の途中で突然食いついたアグネスの叫びに、サイモンはハッと
する。

しまった。また自分の考えなしの一言が、お嬢様の琴線に触れてし
まった……!

「いえ、あの、もしかしたら、と申し上げただけで。根拠も何もご
ざいせんし、あの、お嬢様……?」

「王家の財宝だなんて、どれくらいの額になるのかしら!? きっと天文学的なお値段よね?」

サイモンが己の発言を取り消そうとした時にはすでに、アグネスの脳内にでっかい算盤が出現していた。

おまけに周囲の脳天気たちも、アグネスの妄想に拍車をかけるように、にわかに盛り上がりを見せる。

「財宝なんて面白そうですわね、お姉さま!」

「え、も、もし呪われた何かだったらどうするのさ? 開けたら、ミイラがわらわら出てきてみんな殺されちゃうとかで・・・

怖いよ、僕! そういうのはさ、そつとしとくに限るんだよ? 触らぬ神に祟りなし、君子危うきに近寄らずだよ!」

「大丈夫ですわ、クリス様。ミイラだなんてそんなこと、冒険小説でしかありえない話ですよ。」

ねえ、お姉さま、もしよろしかったら、うちでその指輪、詳しく鑑定させて頂けませんかしら。何かわかるかもしれません。」

「鑑定?・・・でも、お高いんでしょう?」

『ところが、。。。までセットでつけて9800ガ口ですわ!』

・・・などと、リリーお嬢様はもちろん言わなかった。

そのかわり、

「いえ、わたくしが父に直接頼んでみます。

クリスマス様とのかを疑り深い父に認めさせるのが目的ですもの。こちらがお金を頂く訳には参りませんわ。」

決意を秘めた表情で、リリーが言った。

・・・そうだった。

財宝うんぬんで当初の目的を綺麗さっぱり忘れていたアグネスは慌てて肯く。

「そ、そう。悪いわね。うん、財宝なんて、ど、どうでもいいことなんだし。」

ついででいいのよ？ ついでに、ちょこつと調べてもらえれば。」

（嘘つけ！ 完全に婚約の話なんて忘れてたよね！？）

クリスはそう思ったけれど、姉が怖いのももちろん口には出さない。

ヘタレはヘタレなりに生き延びるための知恵をつけてきたのだ。

「お嬢様、書庫に保管されております当時の王家とのやりとりの手紙などもお持ちしますか？鑑定の際に役立つかもしれません。」

サイモンがアグネスに問う。

「そうね。それから・・・あとは。」

アグネスは、ちらりと弟の方に目をやった。

「クリス、あんたが書くものがあるわよね。そっちの方が、よっぽど肝心。」

「え？僕？なに、姉さま？」

きよとんとする弟に、アグネスは呆れてため息をつく。

「一番大事なもんでしょーが！ヘンレイン家への、婚約の申し込みよ。」

クレモン伯爵が裸足で逃げだすくらい凄いのを、バシッと書いてやんなさいよ！」

「あ、え・・・ク、クレモン伯爵が・・・！？」

「そりゃそうよ、あんたがリリーさんと付き合っとうが何だろうが、婚約はあっちが先。」

あんたは、現議員でイケメンで金持ちで伯爵のパーシヴァル・ド・クレモン卿から婚約者を奪うのよ。

もつと気合い入れて覚悟しなさいよ！」

「ぼ、僕が、現議員でイケメンでお金持ちのクレモン伯爵から・・
リ、リリーさんを・・」

クレモン伯爵がイケメンかどうかは不明だが、いまさら気づいたその事実に、クリスはうーんと目を回して人事不省に陥りそうになる。
愛だの恋だの、キャツキャウフフな甘いふわふわした時間はあまりにも短かった。

突然湧いた難題、しかも恋敵はかなりのスペックの高さ。

「クリス様・・・」

リリーは大きな瞳に涙をためて、不安げにクリスを見つめる。

クリスは今にも失ってしまいそうな正気をなんとか保ち、ごくんと息をのんだ。

それから、ぎゅっとこぶしを握って。

「あの・・・リリーさんは、本当に僕でいいの？」

「もちろんですわ！他の方など考えられません。」

一瞬のためらいもなく、強く言いきったリリー。

それを見て、クリスはようやく覚悟を決めた。

・・・愛しい、愛しいリリーさん。

手に入るはずのなかった、僕の天使。

今まで誰とも何も争うことなく、姉とサイモンにあたかな温室で守られてきたクリスだったが、そこを出なければ、手に入らない物がある。

たとえ、どんなに怖くても。

「わかった。・・・頑張るよ、僕・・・だって、リリーさんのためだもの。」

「クリス様！わたくし、嬉しいです！」

リリーはクリスの手をとってぎゅうと握る。

クリスは緊張で強く握りしめていた自分の拳をほどき、その小さく白い手を握り返した。

（・・・でも手紙の内容は、こっそりサイモンに添削してもらおう・・・）

ヘタレ脱却への道は、無理なく、一歩ずつ。

「ではお姉さま、王妃の指輪は、確かにお預かりいたしました。

鑑定の結果は、ヘンレイン商会の鑑定部に急がせますので1週間以内には出せると思います。

・・・クリス様、待ってて下さいましね。わたくしが必ず父を説得して見せますから！」

「うん、お父様が認めて下さるといいけど・・・」

不安そうなクリスとは対照的に、グレイ家にやってきた時とは打って変わってドレスの裾をたくし上げ意気揚々と馬車に乗り込むリリィ。

その手には王妃の指輪、それからクリスの婚約申込書。

大切なその手紙を、リリィは嬉しそうに胸にかき抱いた。

「わたくし、負けませんわ！」

恋は、乙女を強く、図太くさせる。

「いい報告を待ってるわよ。」

「はい、お姉さま。頑張ります。」

手を振るリリーを乗せ、遠ざかっていくヘンレイン家の馬車。その小さくなっていく姿を見送りながら。

『・・・・・・・・あれは世に出してはならないもの・・・・・・・・』

（え・・・・・・・・？なに・・・・・・・・？）

突然妙な声が聞こえた気がして、アグネスはぞくりと身震いした。身にしみついた剣士の習性で身構え、ざっとあたりをうかがった。

・・・・・・・・誰もいない。何もない。間違いない。

気配を感じる能力にはかなりの自信がある。男には腕力で劣るアグネスの生命線だから。

「お嬢様、どうかなさいましたか？」

サイモンが不思議そうに尋ねる。

「え・・・・・・・・あ、ううん。何でもないわ。なんだか疲れたし、暑いし、早く中に入りましょうか。」

アグネスは慌てて笑顔で首を振った。

「そうですね。冷たいお茶でも淹れ直しましょう。」

「僕、いちごのシロップがかかった氷菓子が食べたいなあ。」

「あんた何贅沢言ってるのよ！そんなに涼しくなりたいなら、私が怪談でもしてあげるわよ。」

どんなのがいい？気の弱いヘタレ少年が、大量のミイラに追いかけられて、自分もミイラになる話がいい？それとも暗い井戸の底から

――」

「ぎゃああああ、やめて姉さま！サイモン助けて！」

耳を塞ぎながら逃げ惑うクリス。

それを見て、アグネスとサイモンは笑った。

・・・さっきのは、いったい何だったのだろう。

耳ではなく、頭の中に直接響いたような声。

なんと言ったかはつきり聞き取れなかったけれど、どうしようもなく嫌な予感がした。

クリスの婚約申込書は、サイモンが赤ペン先生をしたからきつと大丈夫。不安になるようなことはない。

では、この妙な胸騒ぎは、何。

・・・指輪のせい？

クリスのためとはいえ、ずっとグレイ家に眠っていた王妃の指輪を外に出してしまった。

おそらく、ご先祖様的にはあまり嬉しくないことであろう。一応、あれはグレイ家の秘宝なのだから。

リリーを疑っているわけではない。

リリーの良家の子女らしいまっすぐな人柄はすでによくわかっていった。

そもそもヘンレイン商会は信用第一の老舗商会だ。おかしいことはするはずない。

そういうことではなく、もっとなんだか違う、別の不安が突然アグネスの胸に広がったのだ。

刻まれていた暗号みたいな文字。

それは何を意味していたのか。財宝の在処？それとも……

（いや、違うわ。これはきっと……財宝の予感よ。

どうしよう、来週から億万長者になっちゃったら。しかもそのうえ逆玉の輿！

財宝さえあれば、クリスの結婚にも肩身の狭い思いをいなくていいんだし。

あ、でも結婚費用だけに使うわけにはいかないわ。

まず屋敷の修理と、それから羊小屋を建てて。父さまと母さまのお墓ももう少し見栄え良くしてあげなきゃ。石碑に文字を刻んで・・・

己の中の不安をかき消すように、アグネスは財宝を売ったお金で何を買うか考え始めた。

その内容がフツ―の乙女の欲しいものと程遠いのはいたしかたない。

しかし、嫌な予感ほど、よく当たる。

昔からそう言われるように、そのアグネスの一瞬の胸騒ぎはは当たり、まもなく、グレイ家の面々は、クリスの初恋どころではない騒動に巻き込まれていくのであった。

リリーに指輪を託した次の日、まだ夜も明けきらぬ早朝からアグネスは出かける準備をしていた。

昨日の夕刻、用心棒ギルドの元締めから急な仕事の依頼が入ったのだ。

その内容は、高級娼館『半月亭』の女数人を、『出張先』のとある有力者の郊外のヴィラまで送り届けてほしいということだった。

半月亭は普通の娼婦のように女たちが娼館に部屋代を払って客をとるようなことはしない。

今回のように有力者個人のヴィラや、高級旅館、客の邸宅などに向いて仕事をする。

娼婦とはいえ、教養や礼儀作法を厳しく叩きこまれた彼女たちの客は、貴族や有力商人、政治家ばかり。

ときには外国の王侯貴族を接待することもあり、下手な下っ端議員なんかより彼女たちはよほど力を持っている。

それは、金であつたり、情報であつたり。

ともかく、彼女たちは護衛が必要なくらいのVIPだ。

そんな半月亭から用心棒ギルドに、クリス・グレイの名で指名があ

ったのだ。

それだけ、クリス・グレイの名が売れてきたということだろう。

かなり急な依頼だったが、アグネスは断ることはしなかった。

前回のような商隊の護衛のような何日もかかる仕事ではないし、半月亭の仕事は払いもいい。

今回指名での仕事に問題がなければ、また半月亭の仕事を回してもらえる。

それに、王家の財宝やらクリスの玉の輿やら、不確実な収入をアテにして働かないわけにもいかない。

人間も羊も毎日ごはんを食べるし、古い屋敷は少しずつ傷んでいく。

暑さが去れば、もうすぐ長い雨の季節。

去年のように大嵐だってやってこないともかぎらない。

それまでにせめて屋根だけでも直しておかないと大変なことになる。

アグネスはベッドに白い寝着を脱ぎ捨て、裸の胸に丁寧にサラシを巻く。

男物のシャツを着て、褐色の髪をひっ詰める。

帽子を目深にかぶって鏡の前に立てば、そこにいるのはもうアグネスではなく、用心棒の『クリス・グレイ』。

「お嬢様、ギルドの迎えの馬車が参りました。」

階下から、サイモンの呼ぶ声がする。

「わかったわ。すぐに行く。」

アグネスは愛用の剣をぶんと一振りした後腰にひっかけ、ぴしゃりと両手で自分の頬を叩いた。

仕事だ。

だから、今、私は、男。

よし、と気合を入れると、アグネスは自分の部屋を出た。

ギルドの迎えの馬車は敷地の中に停まっていた。

急な仕事の際は何度か送ってもらったことがあるけれど、決して乗り心地がいいとは言えない一頭立ての粗末な馬車だ。

浅黒い肌の背の低い御者の男は、いつもと同じく相変わらず愛想なしの無口。

それでも、アグネスはぺこりと頭を下げて乗り込む。

荷台の扉を開ける、・・・と。

「おまえが・・・クリス・グレイか？」

先客がいるとは思ってもいなかったアグネスに、低い声がかけられた。

「・・・え？」

狭い荷台の中で身を屈めるようにし、長い脚を投げだして座っている若い男がこちらを静かに見ていた。

サイモンと同じ歳くらいだろうか、さらりとした紺の髪、右には黒の眼帯をしているが左は深いグリーンの瞳。

上品に整った容姿は一見上流階級の御曹司のようにも見えたが、男の眼帯とその目つきだけでアグネスはその選択肢を打ち消す。

上流階級の羊のように大人しい人間たちは、このようなどう猛な肉食獣のような気配はしない。

病気、もしくは戦いの中で怪我を負って潰れたのであろう右目だけではない。

これは、数多の死線を潜り抜けた者だけがもつ瞳。

あきらかに、彼は、アグネスの同業者。もしくは軍人か何かの経験があるはずだ。

「おまえはクリス・グレイかと聞いている。」

男は重ねてアグネスに問う。耳に心地よい低音だ。

「そうだけど・・・あなたは？」

「ハワードから聞いていないのか。」

今回、おまえと半月亭の仕事をすることになったマードックだ。」

ハワードというのは用心棒ギルドの元締めのことだ。

ハワードから請け負う仕事は、数人のチームで行うことが多く、こうして現場に向かう途中で仲間と合流するのは珍しいことでもなかった。

「いや・・・聞いていない。オレとは初めてだよな。新入りか？」

がたん、と馬車の荷台が揺れ、アグネスは男・・・マードックの向かい側に腰掛ける。

今までハワードのところでこの男を見かけたことは一度もない。

断言できる。こんな男、一緒に仕事をすれば忘れるわけがない。

「・・・ああ。今までは別の街でやっていたからな。」

「そっか、よろしくな、マードック。」

アグネスはふわりと笑うと、マードックに右手を差し出した。

アグネスは、ギルドの仲間との信頼関係を大切にしている。

用心棒という仕事柄、時には生死をかけてともに闘う仲間。

ギルド内にも信用してはいけない人間もたしかにいるが、少なくとも任務中は円滑なチームワークを保たなくてはならない。

「ああ……」

マードックは差し出されたアグネスの右手を少し怪訝な表情で軽く握り返し、じろりと無遠慮な視線をアグネスに向けた。

それこそ、頭のとっぺんからつま先まで。

なんだか市で品定めされる子牛のような、いたたまれない気持ちになつて、アグネスはちよつと頬を引きつらせる。

「……あの……何？」

マードックのように顔のいい人間にじろじろと見まわされるのは、あまりいい気分がなかった。

なにせ、こっちはまだ18歳の乙女なのだ。

もちろん相手は、アグネスのことを男だと思っているのだが。

「・・・思ったより、ずいぶん細いな。」

「え？」

ぼそりとマードックがつぶやいたけれど、アグネスの耳にははつきりと聞き取れなかった。

マードックはアグネスの聞き返しに答えることなく、そのまま黙りこんで目を瞑ってしまう。

（ヘンな人……）

今回の相棒は、ハズレかもしれない。

何を考えているのかよくわからないし、実際剣の腕が立つかどうかは別にして、もっと単純で、力自慢系の相棒の方が仕事もやりやすいのに。

前回の仕事でも同行したジョンとギルの二人なんかは、まさに脳みそまで筋肉でできているような人間で、多少乱暴な性格ではあるが、逆に司令塔タイプで力の弱いアグネスとの相性はよかった。

ハワードもそのことをよく理解しており、最近のアグネスの仕事はほぼこの3人のチームでこなしてきた。

もちろんアグネスより10は年上で、長年用心棒をやってきた二人のプライドは高い。

いくらアグネスの剣の腕が立つとは言っても、二人を手下のように思うことは許されないし、アグネスも二人を先輩として尊重していた。

そのような扱い方さえ心得ていれば、ジョンとギルは、闘いの場においてはアグネスの指示通りに動いてくれる非常に心強い仲間なのだ。

それに比べて、このマードックという男は……。

アグネスは、腰の剣に手を軽く添えたまま目を閉じるマードックを伺い見た。

用心棒を生業としている人間にあるまじき身のこなしの上品さ、顔つきの美しさ。

加えて得体の知れぬ恐ろしさを感じさせるこの男。

一寸の隙もないのは、やはりマードックが常に闘いの場に身をおいてきたからだろうと推測される。

そもそもアグネスは、顔の綺麗な人間は弟のクリスだけでお腹いっぱいだった。

美形なんてロクなもんじゃない。

たとえそのベクトルがクリスのヘタレとは反対方向に向いていたとしても。

（よし、今回の仕事はさつさと終えて、家に帰ろう。

今、うちは、ただでさえあのクソヘタレ弟のせいで面倒な事態になってるんだから！こんな一度きりの相棒のことなんか気にしてる場合じゃないわ。）

昨日のリリーの婚約話、それから王妃の指輪のことを思い出し、ア

グネスは小さくため息をつく。

ともかく今はヘンレイン氏の返事を待つことしかできない。

アグネスは、剣ですっぱりと解決できないような類の問題が、あまり好きではなかった。

・・・恋愛とか、そういったものも。

まだ誰にも恋したことのないアグネスは、実際クリスとリリーのことは姉として応援はしているが、二人の気持ちを本当に理解するには至っていない。

クリスですら恋人ができたというのに、と思うと少し情けない気持ちになるが、恋できる相手がまずいない。

アグネスの周りの男といえば。

クリスとサイモンは家族だ。もちろん却下。

周りの農家の男たちはアグネスとは年齢が合わないし、皆妻子持ちだ。

用心棒仲間には自分は男だと言っている。そもそも粗野な性格で恋愛に向く連中ではない。

たまに葡萄酒やら小麦をせしめ・・・いや、受け取りにグレイ家にやってくる隣の村の修道士や助士達の中には優しくて感じのいい人間もいるが、彼らは一生を神に捧げ、独身で過ごす。

却下、却下、却下。

結論……いない。

18歳という年齢では、聖マルコでは半数の女性がすでに結婚しているか、婚約をしている。

それでもアグネスは、自分が一生独身でも、それほど問題ではないような気がし始めていた。

恋愛に興味がないわけではなかったが、生活に追われ、それより他に考えなければいけないことがアグネスにはありすぎたのだ。

また、14歳の時、身分と引き換えに中年男に売られそうになったことが、多少トラウマにもなっていた。

怖い思いをした分、男嫌いとはまではいかなくとも、ガードは自然と硬くなる。

（……いいのよ、私のことは。

クリスがつまくお嫁さんをもらえて、サイモンが医学校に戻れたら、私は用心棒もやめて女子修道院にでも入って尼さんになるんだから。

それで、今まで用心棒として人を傷つけてきた罪を償うのよ。）

半ば本気でそのようなことを考えながら、アグネスは軽く頭を振った。

やはり漠然とした問題を考えるのは苦手だ。

心が、どこかんでもない所へ迷いこんで行くような気になる。

やめた、やめた。これから、大事な仕事なのだから。

失敗するわけにはいかない。体力も気力も無駄遣いできない。

そう思ったアグネスは、ガタガタという馬車の揺れに身をまかせて目を閉じる。

都の端の歓楽街にある半月亭に着くまでのわずかな時間。

朝まだ早い時間だということもあって、アグネスはすぐに浅い眠りに落ちた。

剣に指をかけたまま眠る癖は、アグネスもマードックと同じだ。

すう、と小さな寝息を立て始めたアグネス。

それを、向かいに座ったマードックは、今まで閉じていた瞳を開いてじっと見つめる。

「クリス・グレイ……期待はずれだったか？」

まあ、せいぜいどれくらいのものか、見せてもらおう。」

静かなマードックのつぶやきは、アグネスには聞こえない。

18（後書き）

やっとストック放出できました。これからたぶん更新速度は落ちます。週に1度、できれば2度って感じでいきたいと思います。ここまで読んで下さった方お一人お一人にスライディング土下座しつつ、ではまた！。

「あら、アンタが噂のクリス・グレイね？どんな大男かと思えば意外とカワイイじゃないの。もしかして、アンタ『まだ』でしょ？料金は特別に安くしてあげるから、アタシの客にならない？」

「ずるいわよ、レイチエル！アタシなら、タダでいいわよ！卒業させてあ・げ・る。」

いやいや、アタシが、アタシが。

次々と伸びてくる女たちの白い腕。むせる様なおしろいの、香水の香り。

遠く旅立ってしまいそんな意識をなんとか奮い立たせ、アグネスは女たちを押しつけた。

「今、オレは仕事なんだっ！」

つか、私は女だ！何を卒業するんだ！心の中で叫ぶ。

残念がる女たちから逃げるように、アグネスは半月亭の馬車の御者の隣席へと飛び乗った。

半月亭に着いて、乗ってきたギルドの粗末な馬車から、半月亭のふた回りほど大きくて立派な馬車2台に女たちを詰め込んで乗り換えようとした時だった。

夜の仕事の女たちは朝に弱いらしく、昨夜の仕事の残り香をつけた

まま、とても『夜の美しい蝶』だとは想像もつかないようなダラシナイ格好でふらふらと現れた。

彼女たちは、本当に才色兼備、矜持の高いことで有名な、半月亭の高級娼婦様達なのだろうか……？

まあ彼女たちにしてみれば、客でもないたかだか用心棒相手になんて気取らなきゃいけないのさ、というところだろう。

まゆ毛のない顔、半分眠った幽霊のようなその姿に、ちょっと怖い・
・なんて思っていたアグネスだったが、凄腕だと噂の用心棒、クリス・グレイが可憐な美少年剣士だとわかるや否やわらわらと集まってきた娼婦たち。

妖艶でグラマラスな彼女らにもみくちやにされるなんて男にとって
は天国以外何物でもないのかもしれないが、アグネスはさらにその恐怖心を煽られる。

こういう時は、お姉さま方に失礼のないように逃げるに限る。

そうしてさっさと御者席に逃げ込んだアグネスだったが。

相棒のマードックは女たちに怯む様子もなく、かといって鼻の下を伸ばすでもなく、ただ無表情のまま、アグネスが乗り込んだ前方の馬車ではなく後方の馬車に乗ると荷台の隅にドカッと腰を下ろした。

もちろん、クリス・グレイのように保護欲をかきたてる華奢な美少年タイプとは真逆にはなるが、かなりのいい男であるマードックを女たちが見逃すはずもない。

アグネスがとんずらしたことで、マードックはさらなる一斉砲火を浴びる。

とにかく半月亭の女たちについている『いい男センサー』は半端でない。

眼帯男だろうが、粗野で地味な服装だろうが、無愛想だろうが、何かピンとくるものがある。美しい獣のような気高さ、危険な感じがまたいい。

彼女たちが客として相手するじじい達にはないものを、マードックはすべて持っているようだった。

馬車の中で我先にマードックの隣に座った女は必死に身なりを整え、今まで培ってきた女としての手練手管を発揮しようとする。

中には化粧を始める女もいる。

「今日はいつたいなんだっていうの。ハーワードのハゲ親父は、うちにこんな色男ばかり送ってきて。商売女相手に、また違うサービスでも始めようっていうのかい？」

年増でリーダー格の女、マチルダがあははと陽気に笑った。

「・・・・・・・・・・」

マードックは無言のまま。しなだれかかる若い娼婦に応えることも拒絶することもない。ただ座っている。

「おや冷たいねえ、お兄さん。そう固くおなりでないよ。まあ冷め

た顔も男前だけど。・・・ん？」

マチルダはふと美しい眉をひそめる。（いや、眉はないのだが。）

「あたし、どこかでお兄さんに会ったかねえ？」

マードックは一瞬視線をあげ、マチルダをちらりと一瞥する。

「いや、そんなことはないはずだが。半月亭は俺には高すぎる。」

「・・・そうだねえ。あたしの気のせいだ。」

マードックの言葉にマチルダはハツとして肯く。それから、やだね、歳食うつていうのは、とあははと笑った。

マチルダも並みの女とは違う。年季の入った、それも半月亭の女だ。思うところがあっても余計なことと言わない。

御者の威勢のいい声、馬の嘶きが聞こえた。馬車は客のヴィラに向かって出発する。

マチルダたち娼婦は陽気に笑い、客の悪口を言い、マードックに媚を売る。

マードックは再び口を閉ざした。

彼を落とすことを諦めた女たちは、再び馬車の中で惰眠を貪る。

そんな馬車の中の様子も、これから自分の身にふりかかる災難も、何も知らないアグネスは、御者席で風を受けながら青空を見つめて

いた。

（仕事とはいえ、別荘地に行くなんて遠足みたい！）

のんきに、そんなことを考えながら。

白く薄い雲が、絵の具を溶かしたようなコバルトブルーの空を流れる。

朝早くの風は涼やかで、まだまだ暑いとはいえ季節が少しずつ進んでいる証拠だ。

二台の馬車が都を離れるにつれて、緑が多くなっていく。

街道の脇に植樹されている糸杉はもちろん、青々と葉を茂らせる榆やオリーブ。夏の日差しの中美しい花を咲かせる百日紅や夾竹桃。

競走馬を多く育てる牧場やなんかもある。

目に映るものの美しさにアグネスの心は躍った。

目的地のヴィラは都の南側、大きな湖のほとりの高級保養地にあり、富裕層や貴族の別荘が点在している。

休暇のたびにそこへ出かける彼らのために街道はよく整備されている。

（お金持ちって、ズルイ・・・いったいどうしたら、2軒も豪華なお屋敷が持てるようになるのかしら。うちなんて、あんなボロ屋敷を維持するのはいっぱいいっぱいなのに。きつとんでもなく悪いことをしてるに違いないわ！でなきゃ、お金なんてそうそう簡単に手に入るもんじゃないのよ！）

豪華な別荘を半目で睨みつつやつかみ半分でブツブツつぶやくアグネス。その仄暗い雰囲気に、

「・・・あ、あの、どうかなさいましたか？」

少しだけ怯えたように、隣の御者がアグネスの方をうかがった。

「い、いやいや。なんでもないです・・・」

慌てて首を振る。そうだ、今は仕事からだ。貧乏人の僻みでお金持ちに余計な嫉妬をしてる場合じゃない。

それにしても、とアグネスは御者席から少し身を乗り出して後方の馬車を振り返り見る。

パカパカと平和に進む2台の馬車。車内から聞こえる女たちの笑い声。

暇なアグネスが余計なことを考えてしまうほど、道中は平和だ。

盗賊団や誘拐団に出くわす気配は微塵もない。

それもそのはず、別荘に行くお金持ちばかりが通るこの道。

大昔は強盗のメッカだったようだが、共和制になったばかりの頃、初代大統領によって街道が整備されてからは馬に乗った兵士が巡回を行っており治安はすっかりよくなった。

もちろん、兵士を雇うにも道を整備するにも平民からの税金が使われていて、このような上流階級しか使用しないような道ばかり特別

扱いするのはオカシイ、という話でもあるのだが。

王政から共和制へ移行した際、国民の多くが抱いていた平等への期待は少しずつおかしい方向へずれつつあった。

特に今のモンフォール大統領はバリバリの差別主義者で平民軽視。汚職の噂も絶えない。

アグネスはよくは知らないが、用心棒仲間たちの噂ではそういった不公平感から早くも王政復古を企てる連中が出てきたとか何とか。たしか、50年前に王家が断絶したのは、直系が絶えてしまったことにより、王宮内で王位継承権をめぐる内部紛争が勃発し暗殺などで多くの死者が出たことが原因だったと聞く。

現在王家の血を一番濃く引くのは最後の王の妹であるマルグレーテ王女の降嫁先、オルレアン家。

アグネスにとっては遠い遠い親戚にあたる。もちろん付き合いなど皆無だが。

（・・・王様でも大統領でもなんでもいいから、皆が住みやすい国にして欲しいもんだわ。）

生まれてこのかた一度も特権階級の恩恵を受けた覚えのないアグネスは切実にそう思う。

食べていく大変さは、平民以上にわかっているつもりだったから。

「あの小さな森を過ぎればすぐ、シモン男爵の別荘ですよ。」

御者が前方を指さしながら言う。

アグネスにも、こんもりと茂る小さな森が見えた。

「なんとか何事もなく着きそうですね。腕利きの剣士のクリス・グレイさんのお仕事としては物足りませんでしたか？」

到着までもう少し、安心感から気が緩んできたのか半月亭の御者は冗談半分でそう言った。

「いや・・無事に越したことはないですよ。でも、最後まで気は抜けません。まだ復路もありますから。」

アグネスは首を振りながらそう答えた。

しかし内心、御者の言うとおり、この先何かある可能性は低いだろう。

そう、思っていた。

アグネスが異変を感じたのは、馬車が薄暗い森に差しかつてすぐのことだった。

微かな金属音が聞こえた。・・・いや、実際に聞こえるわけではない。馬の蹄、鼻息。女たちの絶えないおしゃべり。ただでさえこんなに賑やかな馬車の一行なのだから。

けれど、アグネスにはたしかにわかった。耳、というよりは、『肌で聞こえた』という感覚に近いかもしれない。

誰かがこの森の中に潜んでいる。それも複数。

そう確信してからさり気にあたりを窺うと、樹の上から、影から、不穏な視線を感じた。

明らかにこっちを見ている。狙いはこの馬車だと見て間違いないだろう。

（1、2・・・3・・・4人・・・？コソ泥程度なら一人でいけるかな。）

ものの3秒ほどの間に判断を終えたアグネスは走る馬車からざんつと飛び降りる。

いくら軽いアグネスでも衝撃で砂利が軽く砂埃を上げた。

「く、クリスさん!？」

前触れもなく飛び降りたアグネスに慌てた御者が、後ろを振り返りながら手綱を引いて馬を止めようとする。アグネスは腰の剣を抜きながら、

「先に行け!男爵家の別荘の中まで早く!!!後ろの車も急いで!」

二台目の御者にも聞こえるよう大声で怒鳴った。

そのとたん、タタタツと小気味いい音をたてて矢が馬車の幌に刺さる。

アグネスの方に飛んできた銀の矢は、その剣でガキンと払いのけた。目を丸くしながらも、御者らも状況がわかったのかスピードをあげる。

きゃあきゃあと女たちの喚く声が聞こえた。

そんな中。

「・・・おい、俺はどうすればいい?」

馬車の後ろから首だけ出したマードックが、まるで、クリケットの相談でもするかのようにのんびりとアグネスに問う。

「とりあえず・・・男爵家までさっさと無事に連れってつてくれっ!」

カチンカチンと金属音を立てて、剣で矢から自分と先を行く馬車を守りながらアグネスは叫んだ。

腿に巻いたベルトから小刀を取り出し、見えない樹上の敵に向かって一直線に投げる。

ぎゃあ、という男の声。ドサッと降ってくる。……一人やった！あと3人！

投げるのはあまり得意でないアグネスは鬱陶しい弓矢が止んだことに、よし！と心の中でガッツポーズをとる。

ヒュー、と口笛を吹いたマードック。

「15分たつても来なかったら迎えにきてやる。」

「5分で終わらせる！」

遠ざかっていくマードックにそう答えた時には、アグネスの前には屈強な3人の男。

「ほう、坊主、生意気な口を利いてくれるじゃないか！」

「5分でおまえがやられるってことだろ？」

「こんなガキ、5分もいらねえ。こっちは3人だ！」

男たちは『クリス・グレイ』を知らないのか、それとも知っただけで意に介さないのか、余裕綽々の表情で薄ら笑いを浮かべている。

「そうだな・・・5分もいらないか。3分だ。」

アグネスは、男たちになこりと笑った。

・・・10分後。

アグネスの前には、4人の大男が折り重なるようにして倒れていた。樹の上から矢を放っていた男もわざわざ拾ってきて止血までしてやった。もちろん鳩尾に一発食らわせて気絶はさせたけれど。

気を失っている彼らを、軍警察に差し出すため懷から取り出した紐でぐるぐると縛る。

「まったく・・・しつこかったわね。もうお目当ての馬車もないんだし、さっさと諦めてくれればいいのに。」

ぶつぶつと呟きながら大きな樹の根元に手際よく一纏めにした。ちよつとやさつとじゃ決して解けないこの縛り方は、用心棒を始めた頃にベテランから習ったものだ。

全てがおわるとアグネスはふうと一息ついた。呼吸が乱れるほどではなかったにしろ、少し梃子摺ってしまった。

相手は決して強かったわけではない。アグネスの今までの経験からすればゴロツキのうちでも中の上、といったところか。3人でまとめてかかってきてもアグネスの強さの比ではない。

ただ、いつもの強盗の類ならここまで強さに差があればさつさと逃げ出してくれるものだ。割に合わないリスクはとらないのが普通のゴロツキ。

ところが男たちは軽く脅して眉やヒゲを半分そり落としてやっても、武器を壊してやってもアグネスに襲い掛かってきた。

そのせいで、殺さないように倒そうと思っただけ以上に時間がかかってしまったのだ。

（・・・意味がわからない。これじゃ、まるで私をやつつけることが目的だったみたいじゃないの。）

しかしアグネス本人は賞金稼ぎのターゲットになった覚えもないし、こいつらの顔に見覚えもないし、狙われるようなことなど何もないはず。そう思いながらアグネスが首をかしげていると。

「15分だ。」

突然そんな声とともにパキリと背後で小枝を踏みしめる音がして、アグネスはハッと振り返る。

思わず剣を抜こうとしたが、その相手の顔を見るとホッとして手を下ろした。

「・・・なんだ、アンタか。」

マードックだった。そういえば15分たったなら迎えにくると言っていたことを思い出す。

本当に来るとはあまり思っていなかったが、無愛想男とはいえ用心棒仕事に一応責任感を持っているということだろうか。

こちらにやってきたマードックは、樹の根元で伸びている男たちを静かに見下ろす。

「殺さなかったのか。ご丁寧に生かしたまま捕らえて。」

少し呆れたようなその声の響きに、アグネスはムツとする。

そりゃ、一撃で殺してしまった方が面倒はかからないし早い。それに止むを得ないときだってあるだろう。自分や、客の命が危険にさらされてしまったら・・・。

でもゴロツキだろうが人間の命はひとつしかない。

それから共和制のもとでは用心棒ギルドも法に従うのが当たり前。正当防衛だとしても、むやみに殺すことは禁じられている。

法には可能な限り反しない。それが雇い主ハウードのポリシーでもあり、アグネスのポリシーでもあった。

無論それは奇麗事で、都を離れば離れるほど法は意味のないものになっている現状。

他の町の用心棒ギルドでは、暗殺までも平気で請け負っているという話も聞いたことがある。

マードックが以前属していた用心棒ギルドがどのようなものであったかは知らないが、アグネスだって用心棒が正義の味方ではないということとはわかっていた。

ひとことも二言も言ってやりたいところではあるが、アグネスは冷

静さを取り戻す。そこまで世間知らずではないつもりだ。

「ただの強盗相手だぞ。こっちだって殺すようなことは何もされていない。——まあそのせいで、ちょっと手間取ったけどな。それより半月亭の連中は？」

「男爵家の別荘まで届けてきた。すぐそこだ。俺たちも戻るぞ。こいつらを軍に引き渡すなら男爵家の使用人に連絡するよう頼めばいい。」

それだけ言つと、くるりと踵を返すマードック。それから

「・・・やはりこの程度のやつらでは話にならんか。」

くく、と喉で小さく笑った。

「え？何？」

自分より相当背の高いマードックを小走りに追いかけながらアグネスが問う。

だが案の定マードックからの返答はない。ただまっすぐに前を向いてスタスタと歩いていってしまう。

（・・・もーっとなんなのこの人！ほんととやりづらい！）

マードックのあまりのマイペースぶりに、アグネスはキツとその広い背中を睨んだ。

ぼそぼそと呟いては答えないところはもちろん、整った顔立ち、細

身で筋肉のついた美しい体つき、まるでどこかの王室で礼儀作法を叩き込まれたかのような優雅な歩き方に至るまで、なんだかこつちがいちいち馬鹿にされているような気になって癢にさわる。

いや、もちろん被害妄想というか僻みでしかないのはわかっている。わかつてはいるのだが・・・。

しかし今夜は男爵家の別荘で泊まりの番だ。

パーティーの間、それから、あまり考えたくはないが、その後のおじさん達のお楽しみまで屋敷に控えていなくてはならない。

仕事は明日の昼過ぎ、半月亭に女達を無事に送り返すまで続くのだ。

少なくともそれまで、マードックは相棒。我慢しなくては。我慢よ、私。

アグネスは内心ぶつぶつと文句を言いながらも、黙って先に行くマードックの後に従いシモン男爵家の別荘へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0107w/>

公爵令嬢は用心棒！

2011年9月4日17時24分発行